

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成29年 4月 第194号 年間購読料1,000円 (1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

バトンタッチを支える『地域包括ケア』の途へ

この図は、地域包括ケアシステムを『植木鉢』になぞらえて表示したものです。『本人の選択と本人・家族の心構え』を皿にして、『すまいとすまい方』の植木鉢があり、『介護予防・生活支援』の土に、『医療・看護』、『介護・リハビリテーション』、『保健・福祉』の3枚の葉っぱが青々と繁っています。高齢者が健康で生き生きと暮らす為の要件を示す図として、『地域包括ケア研究会』が創ったものです。



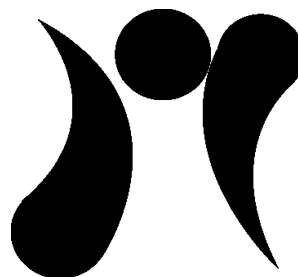
今年度から、「要支援」と認定された人は「介護保険給付」の対象から外れて、地方行政が行う『介護予防・日常生活支援総合事業』を利用する仕組みに変わります。一般的に『土』が肥沃に成れば、植物は青々と茂ります。土としての『介護予防・生活支援』を豊かにする為の手立てとして、『新しい総合事業』が企画されたのです。

総合事業で「介護予防」と「生活支援」を活発に行い、健康な高齢者が相互の助け合いを豊かに行う地域社会になれば、健康で生き生きと暮らす高齢者が増えて健康寿命が延び、「介護保険給付総額」が減少する、と行政は大きな期待を寄せています。

しかし、「老いた葉っぱ」は自然の摂理に添って、それ程遠くない時期に必ず枯れて、永い人生の「実りと種」を残して朽ち、土に戻ります。そして「新たな命」を育む肥しと成って「限りある命と命」を繋ぐ役割を果たし、次の世代に社会を引継ぎます。『医療・看護』『介護・リハビリ』『保健・福祉』の各専門職も、自然の摂理に添い枯れる葉っぱが土に戻る途を『伴走』するのです。

人は、昔も今も此れからも、『輪廻転生の世界』で生きています。次の世代を視野に入れた仕組みを創るには、『限りを迎えた命』と『新たに生れる命』を繋ぐ役割を果たす『土』が重要になります。『老いた命』には、若い頃に『遺伝子を引継いだ命』に対して、『社会』を構成して生きる為に必要な

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

『思想と社会性』を伝える重要な役割が課せられています。枯れて朽ちる『老いの命』を受容れ、『新たに芽吹く命』を育てる『肥し』として溜め込む『思想性の豊かな土』を創らなければなりません。人間のみが持つ『老いの本能・宿命』です。

介護予防を主眼にして「要介護にならない様に、重度化しない様に」と努力している高齢者にとって、「要介護になってしまった人、重度化してしまった人」が間近に居る生活は居心地が悪く、その様な人が側にいない暮らしを望み、要介護の人には『もっと相応しい場所』への『移住』を求めます。其れが『表向きは在宅重視』と言いながらも、『施設入所や入院』の希望が減らない、主たる要因だと思えます。そして『もっと相応しい対応』を求めて、医療や介護への『期待と依存』が増大し、医療費と介護費の社会的負担が増えると同時に、『現場の負担感』が大きくなって職員が疲労し、社会全体が苦慮しています。

重度の要介護高齢者とも、生れながらに障害を持つ子供とも、そして死を間近に控えた老人とも、『共に暮らす社会』を創るには、介護予防を起点として「自らの健康を志向する意欲と努力」を求める「施策」ではなく、「命の限り」を受容れる『心構えと覚悟』を起点として次の世代を視野に入れ、輪廻転生の世界で生きる吾身を想像し、『死後にも続く関係性』の中に存在価値を見いだす『思想と社会性』を養う事を、『施策の主眼』とするべきなのです。

『輪廻の思想』を基に、次の世代を視野に入れた地域包括ケアシステムを構築する為の『土』とするには、『本人の選択と本人・家族の心構え』が、もっと相応しいのではないかと考えています。

自らが『QOL』について深く考えて「すまいとすまい方」を『選択』し、親の暮らしに潜む『QOL』について深く考察する子や孫が居て、その本人と家族の『心構え』や『覚悟と誇り』に応える専門職と地域の人が居て、「ピンピン」と「コロリ」の間に生じる『要介護の暮らし』を地域で支えて、限りある命と命を繋ぐ『ケアシステム』が成立します。

『介護』は迷惑でも犠牲でも負担でもなく、社会を構成して生きる為の『思想と社会性』を秘めた、次世代に手渡す『バトン』なのです。老いの身を他者に委ねる際の『覚悟と誇り』が潜んだ『バトンタッチ』こそが、『地域包括ケアシステム』の『原点』なのです。

40年続く少子化傾向に歯止めを掛け、『団塊後』の社会が活力を失うことの無いように準備する為、『介護予防・生活支援』は、植木鉢としての『すまいとすまい方』を支える皿としての『地域社会』であって欲しい、と願います。

その皿を更に強固にする為に、『介護予防』+『要介護への準備』を同時に行い、『介護に宿る相互支援の関係性』を地域に定着させて、移住を求めない『共に暮らす生活支援策』を企画し、少しずつ実施して行きたいと念じます。

今年は、『すまいとすまい方』への新たな試みとして『空き家を活用したグループハウス』を開設し、『住民相互の支援関係』が広がる『地域づくり』を目指しての一步を踏み出したい、と考えています。

是非ご協力をお願い致します。



ふたりの桃源郷

3月の語ろう会は、4年前にテレビ放映された「ふたりの桃源郷」を視聴しました。山口県の山中で暮らす夫婦と取り巻く家族の関わりを約20年かけて追跡したドキュメンタリー番組です。若い時に一から山を開拓し自給自足の生活を始め、子育ての時期は山を下り、子供の自立と共に再び二人で山の生活を選択しました。

電気、ガス、水道もない環境で出来る限りの食料は自らの手で生産する生活でした。二人ともが80歳を超え病気を抱えながらも山での暮らしを維持しようとする夫婦、二人の生活を心配する娘たちに父は山で暮らすという覚悟を伝えます。

病気などで山での生活が困難になって施設に入居してからも、二人は山へ通い続けます。娘たちも心配はしながらも両親の選択を尊重し支え、二人を最期まで見届けました。自分たちが選択して生き生きと生きる事、老いる事、自分らしく死ぬ事、とは、そして生きざまを娘たちに見せ、バトンを託し、受け取る事、それらが映像の中にありました。

私はこの映像を当時同僚であったUさんに視聴を薦めた記憶があります。Uさんの両親も遠く離れた地域で農業をされていました。一年に何回かは、最初は安否確認、両親が老いるに伴い稲刈りの手伝い、雪下ろしの作業といったことが増えていきました。病気、交通事故など色々なことがあったようです。私は彼女の両親とお会いしたこともなかったのですが、両親が作られたお米を定期的買って、送って頂いていたこともあり、その時にお米の箱の中にティッシュにくるまれたフキノトウが同封されていることがありました。彼女から聞く両親の事や自分の中での思いもあって勝手にイメージをしていたこともあり、この映像を薦めたのかもしれませんが。

2年前彼女は両親の介護で実家に帰りました。両親にとって自分が生活する所が桃源郷であったのかなと、それを支えるために彼女も帰郷したのかなと今回改めて感じました。

参加して頂いた皆さまもそれぞれ感じ、考えることの時間となりましたでしょうか。

今年度も「介護についてみんなで語ろう会」を開催しますので、ご参加ください。

*毎月第4金曜日 14時～15時

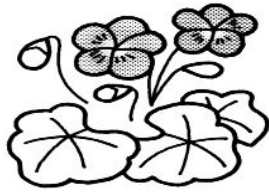
*リバティかこがわ 2階

(老人介護支援センター 岩田 みつ子)

【せいりょう園空き情報 平成29年 4月19日現在】

- ・サービス付き高齢者向け住宅「自愛の家さくら」：
A(19.07㎡) 8室、C(24.67㎡) 4室、E(25.80㎡) 2室
- ・サービス付き高齢者向け住宅「リバティかこがわ」：A(33㎡) 3室、C(39㎡) 1室
- ・ケアハウス：空きなし (バス・トイレ・キッチン付 24㎡)
- ・グループホーム：空きなし ・グループホームまどか：空きなし

【問合せ】 せいりょう園 Tel(079)421-7156 / (079)424-3433



8 1 才生涯貧乏

ユニット型特養 池の向3丁目6番地 渡邊日照

私は昭和10年4月10日に、田舎の小作農家に8人兄弟の6番目に誕生しました。昭和16年4月田代西部小学校に入学しました。当時、私は泣き虫で朝礼の合図の鐘が鳴ると一斉に運動場に出て行きますが、私は靴が履けず泣いていると2年生の姉さんが靴を履かせてくれました。戦時中なので整列している時に手先が伸びていないと先生が走ってきて叩きました。現在の学校なら、どうでしょうか。問題になります。私達の時代には当たり前のように思われていた体操の時間は、竹槍で藁人形を突き刺す練習や農家の畑の草取り、軍馬の餌にする草を刈って干草にしていました。学校の運動場も耕して、畑にして芋を植えていました。勉強は殆どしていません。たまに学校に行って国語の文章の短いページ、算数の99の暗唱を職員室で先生の前で暗唱出来るまでやっていました。間違えたら教室で練習して出来るまで帰してもらえません。教育勅語もやっていました。私は意外と記憶が良かったから、2回位でパスしました。

空襲警報が出ると山に隠れて熊本市内の様子を見ていました。米機のB29爆撃機を高射砲で撃っても、B29の100m下くらいで爆発したように見えました。ラジオでは「勝った。勝った。」と戦争を煽り立てていたと思います。

各家庭では金属の弁当箱、金目のものは全部提供していました。今思うと「戦争に勝てるはずがない」と思っていました。昭和20年8月15日に終戦を迎えて今までの小作農地を買い取り、自作農になりました。しかし家族が多く全員で仕事する田畑はなく、兄弟は年期奉公に出て行きました。昭和24年に中学校に入学して物造りが好きで卒業後、大工の弟子になりましたが、2年程で辞めて帰りました。田舎の棟梁から誘われたが断ってフリーターをやっている時に大阪の友達から大阪に来ないかと誘いがあり、農業に飽きていた為、大阪府枚岡市四條町の町工場に就職したが、日当260円。月1万円足らずでした。

昭和36年に結婚。これでは生活出来ないと思って、尼崎の島文工業に転職しましたが、日当460円でした。1ヶ月頑張っても残業含んで15000円程度で、生活は苦しく家内は、パートタイマーの内職をしていました。アパートに暮らしていましたが、そこでは裕福に暮らしている人から馬鹿にされ、子供が道路を歩いていると足を掛けて転ぶ姿を見て楽しんでいる母親もいました。私は腹が立って文句を言いたいけど、言ったら昼間は留守で、後は母親同士の喧嘩になるだけです。我慢の連続でした。しかし、その人が引っ越しして、自分たちも尼崎で13年過ごし、会社でも仕事が減り、加古川へ行ってくれるかとの打診が有

第24回 木野雅之ヴァイオリン・リサイタル

平成29年6月24日(土) 18:00~開場 18:30~開演

リバティかがわ2Fにて開催いたします。
素敵なヴァイオリンの音色を感じて頂けたらと思います。
皆様のご来場を、お待ちしております。



りました。子供たちに行くかどうか尋ねたら、行っても良いとの事でOKの返事をしました。

私も新しい職場のほうが好きで、遣り甲斐を感じます。もともと冒険が好きで職場にも直ぐに慣れました。現場の職長が糖尿の気があり山歩きに誘われてから、アウトドアが病みつきで、それでも飽き足らず、年に春秋2回旅行に出かけ、温泉を巡りました。兵庫県から東は群馬まで、西は四国の道後温泉やかずら橋ぐらいです。貧乏人の安月給で遊んでばかりで悪いと思いながらも役職をしていると、人にばかり進めて自分は行かないと言うわけにもいかず、役が付いていたら良いことばかりではなかったです。

昭和50年頃から生活も徐々に安定しますが、子供の幼稚園と出費がかさむから、生活は以前と変わらなく、子供は鍵っ子で塾にも行かず、学校では大変苦勞を掛けたと思っています。そろそろ子供の高校入試を考えないといけない時期に塾にも行けず苦勞させたけど、高校入学出来て安心しました。大学に行くかと聞いたら二流の大学に行っても仕方がない。その時分、大学に行っても仕事が無いと言っていた時がありました。

今、世間では大学は普通に行っています。私は、会社で学歴を言われるのが1番嫌いでした。どの位の学力があるのかと反発していました。子供達は親の苦勞を知らず、自分がぼんぼん育ちと思って「金を貸せ。」と言ってきます。「後で返す。」と言って来るが、「もう返さなくてええわ。俺達夫婦が死んだら墓だけきちんと守ってくれたらええ。」と言いました。私も定年近くになり、明石市の神鋼コベルコ（現在；三菱マテリアル）で5年勤めていました。60歳になると失業保険が半分になると聞いたので退社して家で家庭菜園を行い、毎日気の向くままぶらぶらと過ごしていました。

ある時、ある電気屋で電卓が900円の広告がチラシにあったので朝一番と思い、単車で行く途中で事故に合いました。加古川県立医療センターにて頸椎の手術を受けた後、病室でドクターから足は99%動かない。手は少し動くと言われ、生きていても仕方がない。死ぬことばかりを考えていました。自殺の館があれば良いなと考え、病院で登録したら安楽死させてくれたら良いなと考えることもあります。

こんな身体では夢も希望もないですね。この前の新聞で世界長寿番付が載って日本が1位であったが、政府は何もしてくれない。以前の新聞で、「人を殺して死刑になりたかった。」と言っていたが、死にたかったら一人で死ねばいいと思います。皆さんはどう考えますか？

病院なんか行くと魚が酸欠したようにして何を考えて生きているのかと思うことがあります。病院でミイラのようになって死ぬより、みずみずしい身体で死にたいですね。今の状態で行くと、あと何年あるか不安で、どんな死に方をするかと思っています。

☆男性介護者の為の料理教室のお知らせ☆

曜日；毎週金曜日 時間；13：30～15：00 参加費；1回300円

場所；小規模多機能「輝きの家ながすな」テイルーム

5月の献立予定

5日；こどもの日メニュー

19日；揚げパンを…2品

【担当】藤本 あや（調理師・栄養士）

12日；男子が喜ぶ…!? フライパン料理

26日；新玉ねぎたっぷりギョーザ

※年齢・性別は問いません。お気軽に、のぞいてみて下さい。



浄土真宗本願寺派 宣能寺 岩本 融乗 住職

例年では、満開の桜で心が浮き立つ時期ですが、今年はやっと東京で開花宣言がでたばかりです。加古川ではわずかにつぼみが膨らみひんやりとした日でした。本日の仏教講話はせいりょう園の近くにある浄土真宗本願寺派 宣能寺の岩本融乗ご住職です。

ご住職は最初に「ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし、南無阿弥陀仏」と唱えられ、ご講話が始まりました。「4月はお釈迦様のお誕生日で花まつりがありますね。宣能寺でも昨日、花まつりが行われました。お釈迦様が生まれた時にさーっと一斉に花が咲き、甘露の雨が降り注いで来ました。お釈迦様の上から甘茶を注ぎ、灌仏会と言いますが、そこから花祭りの行事が続いています。お釈迦様はインドの北部のカピラ城で王子としてお生まれになりました。お釈迦様は物心ついた頃に東の門から初めて出て、お年寄りに出会いました。南の門から出て病氣の人に、西の門から出て死んでいる人に、北の門から出て修行しているお坊さんに出会いました。お城の恵まれた環境の中におられたので、こうした人達に出会い、衝撃を受けられました。人間は老いる事、病気になる事、死ぬ事は避けられない(老病死)。苦しみを取り除いて皆が幸せになれる道を求めていると修行者に聞かされ、その言葉が頭から離れなくなりました。29歳で王子の位を捨て出家されました。厳しい修行をされましたが、自分の求めるものが得られず、菩提樹のもとで座禅を組んで瞑想に入られました。人にはいろんな欲望・腹立ち・憎しみがある、これを煩惱と言いますが、この煩惱を吹き消してしまえば、そこに本当の安らぎがあるとの境地に達し、悟りを開かれたのです。

世の中の本当の命のあり方(真実)に気付かれ、それを人々に説いて回られました。その人に応じた説き方をされたので、後にたくさんのお経に纏まりました。お釈迦様が伝えて下さ



グループホームより

平成29年4月1日(土) お花見食事会



お花見当日は桜が咲いていないだろうと、グループホームの入口には折り紙を桜の形に切ったものを、デイサービス利用の皆さんが、1つ1つ貼り付けた大きな桜の木を飾ることにしました。

通りかかる方々に、「ここだけ満開ですよ。」とお声をかけると、「どうやって作ったの?」「本当に満開!!」「すごく上手ね。」「誰が作ったんですか?」「今年のお花見は、これやね。」と、多くの方々に感心を持っていただきました。

春の冷たい風と桜の蕾、貼り絵の桜と両方を楽しんでもらえたと思います。後々に、写真を見た時、「この年は桜が咲いてなくて寒かったね。」と、思い出話の一つになればいいなと思います。

(グループホーム主任 別府 克彦)

ったお経(教え)を分かり易く伝えるのが私達の仕事です。」とお釈迦様の誕生から仏教への足跡を丁寧に教えて頂きました。そしてご自分の檀家さんの話等をされ、お経が精神的な心の拠り所であり、現実の生活の中での指針となる事についてお話されました。

「人生は苦しみの連続であり、幸せもいつまでも続きません。突然終わってしまう事もあります。本当にあてにならないのが生きる事であると教えられました。傷つける人もいれば、守ってくれる人もいます。それでも今までこうやって無事に生きて来られたのは、辛い事があっても家族や父母がいて、たくさんの人々の助けによって、今の私があるのだと思います。先立っていった父や母やご先祖様への感謝の思いは人として忘れてはならない事だと思います。また、人間生まれてくるのも一人、死んでいくのも一人です。でも仏様は決して私達の傍を離れません。左手は私達(煩惱の持ち主)、右手は仏様(清浄)と言いますが、両手を合わすと仏様と自分はいつも一緒です。包んで下さっているのが仏様です。そして自分が唱える念仏であっても、周りが唱える念仏であってもそれは自分の口を通して仏様が現われて下さっています。いろんな事があると思いますが、いつでもどこでも手を合わせて、先立って逝かれた方の事を思い出して欲しいです。きっと優しく包んで下さるはずですよ。」とお話し頂き、冒頭の言葉『ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべし・・・』と唱えられ、ご講話が終わりました。

終始にこやかに優しく、包み込むようにお話しされ、今の自分があるのは一人ではなく、多くの方々の助けがあって生きているのだと教えて頂きました。

ありがとうございました。

(岡村 照代)



平成29年3月20日(祝月) 音楽レクリエーション



春にちなんだ歌をストーリー展開で、歌って踊って楽しい時間を過ごしました。特に「嬉しい雛祭り」では選ばれた利用者が女雛、男雛、三人官女、五人囃子に扮し、「仰げば尊し」では100歳を超える方が女子学生に扮して、卒業証書に代わる「いつも元気で賞」や「若々しいで賞」等それぞれの感謝状を受け取って、喜んでおられる顔が印象的でした。

ゆりかごの皆さん、ありがとうございました。

(デイサービス 西島 守彦)



平成29年3月30日(木) 和太鼓演奏

暖かい陽気の中、安井さん夫婦により和太鼓の演奏が行われました。和太鼓の響きに詩吟を織り交ぜ、まさにここは日本人としての魂を揺さ振られる空間。

最後は太鼓を叩くと脳が活性化することや、ストレスの発散にもなると聞き、利用者、職員も一緒に和太鼓を叩かせてもらう貴重な体験をさせていただき、皆さん大喜び。



ありがとうございました。 (デイサービス 西島 守彦)

華麗なるヴァイオリンとピアノの協演

モーツァルト ヴァイオリン・ソナタ第40番 変ロ長調 K.454

R・シュトラウス ヴァイオリン・ソナタ 変ホ長調 作品18 ほか



ヴァイオリン

＜村津 瑠紀 (むらつ たまき)＞

加古川市出身。3歳よりヴァイオリンを始める。別府幼稚園、野口南小学校、中部中学校、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、同大学首席卒業。学内にて福島賞、安宅賞、アカンサス音楽賞受賞。2010年同大学院修了。第56回全日本学生音楽コンクール東京大会高校の部奨励賞、第3回ウラルスク国際コンクール第3位。第6回マルシュナー国際コンクール第4位。第10回松方ホール音楽賞大賞受賞。「五嶋みどりと探る現代音楽の魅力」公開マスタークラス受講。姫路交響楽団、藝大フィルハーモニア等と協演。第33～35回藝大定期室内楽演奏会、姫路・赤穂国際音楽祭の関連コンサート等にも多数出演。これまでに東京・所沢・姫路でソロリサイタル。ヴァイオリンを藤井たみ子、東儀幸、澤和樹、小川有紀子、若林暢、ジェラルド・プーレ、山口裕之、室内楽を岡山潔、山崎伸子、山口裕之の各氏に師事。現在、東京藝術大学音楽学部非常勤講師、及び藝大フィルハーモニア第2ヴァイオリン首席奏者。

ピアノ

＜鳥羽 亜矢子 (とば あやこ)＞

東京藝術大学音楽学部を経て、インディアナ大学にて研鑽を積む。渡米後、巨匠ヤーノシュ・シュタルケル氏のアシスタントピアニストを務めた他、インディアナ大学より推薦され、ケネディーセンター・テラスシアター(ワシントンD.C.)でのミレニアムコンサート等、多数出演。2005年同大学にて、ヤーノシュ・シュタルケル、ミリアム・フリード両特別教授クラスの非常勤伴奏講師(専属クラスピアニスト)を兼任。これまでにピアノを井上英子、堀江孝子、山城浩一、練木繁夫の各氏に、室内楽を野平一郎、漆原啓子、店村眞積、イクワン・ベイ、フェデリコ・アゴ스티ーニ、ヤーノシュ・シュタルケルの各氏に師事。2006年帰国。以降、室内楽演奏会、リサイタル、CD録音、NHK-FM等での共演、コンクール、オーディション等の伴奏、国内外の弦楽セミナー、コンクール等の公式ピアニストを務めている。東京藝術大学音楽学部弦楽科及び指揮科非常勤講師(演奏研究員)を務める(2009年4月～2016年3月)。



日時 2017年5月28日(日) 午後2:00開演

会場 リバティかこがわ 2Fホール(加古川市野口町長砂95-20)

[入場料] 会員 1,000円 非会員 2,000円

会費3,000円で会員となり、入場することができます。

会員登録されると、次回より会員料金1,000円で入場できます。

お問合せ TEL 079-421-7156 (せいりょう園)

アクセス: ①JR加古川駅・東加古川駅・山陽電鉄別府駅より 車で7分

②JR加古川駅または東加古川駅よりゾーンバスで長砂公民館前下車徒歩1分